



1989年(平成元年)
11月号(No. 533)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

解禁された天山の名峰	田村俊介……(1)
海外の山……	(2)
「ククチカの死」	
海外登山基金委員会発足の経緯……	(2)
会員アンケート結果報告(4)	
西村政晃……	(3)
岡茂雄さんのこと……丸山尚一……	(5)
追悼 元会員 大飼哲夫氏……	(6)
計報 鄭在泓……	(6)
東西南北……	(6)
「還暦セーターのはなし」「ネパール人ジャーナリスト二氏が来日」「XCスキーのすすめ」ほか	
自然保護随想……	(8)
図書紹介……	(11)
「天狗と修験者」「阿蘇万歳」「裏山の博物誌」「小坂の三角点」「HIMAL」	
報告……	(13)
山研を考える集い、ビアパーティ、三水会現地集会、小林純子先生と鎌倉の山を歩く	
図書受入報告……	(15)
会務報告(9, 10月理事会)……	(15)
新入会員、住所表示変更……	(18)
ルーム日記、会員異動……	(18)
お知らせ……	(19)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテロップ電話
234 六六五九

解禁された天山の名峰

田村俊介

眼前には秀麗なハン・テングリ(七〇一〇呎)があった。ハン・テングリは「精霊の王」という意味である。この南面からの山容は、鋭利な彫刻刀で彫り上げられたような端正な姿をしている。

昨年見た北面からとはまったく異なる山容である。北側は高度差三千呎のずばりと切れ落ちた氷壁であった。

さらにヘリは南イヌイリチエク氷河を遡行して行く。氷河の最深部には、牛の背のようにむっくりしたポベータ峰(七四三九呎)が現れた。「勝利峰」という意味のこの天山の最高峰は、その下部から数本の長い、鋭く尖った稜

線を持つ山稜を派生していて、一風変わった山容である。

山麓のイヌイリチエク氷河は、中央天山を西側で迂回し、アク・スウ河、タリム河へと続いて行く。水の流れ行く先は、何とタクラマカン砂漠のロプ・ノール湖である。

ポベータ峰の稜線の向う側は中国新疆ウイグル自治区になっている。この山の中国名はトムール峰である。

こんな国境の山岳地帯をヘリで飛んでくれ、自由にビデオ・カメラを回しても良いと言うのである。これもペレストロイカのおかげだ。

ソ連の山は、政治的障害により長い

間登山ができなかった。情報も少なかった。だからロシヤ語で書かれた山岳書を読むと、自分がはじめて山に入っていくような気がしたものだ。実際、行くとなると、なかなか大変なことだった。

それでも、次第にカフカスに行けた。ここ何年かは特定の山域はずい分入山しやすくなってきた。

だが、天山中央部は中ソ国境地帯でもあり、そう安々と解禁にならないと思っていた。

それが今年の夏から解禁になり、私もカザフ共和国スポーツ委員会より、ハン・テングリ国際登山キャンプに招

次代に残そう美しい山と溪

内に乗り継ぎ、夜行飛行で行けば、次の日の朝にはアルマ・アタから三百*離れたカルカラ・キャンプ(二二〇〇呎)まで行くことができる。アルマ・アタからカルカラ・キャンプまでは車で五時間ほどである。

カルカラ・キャンプは中間キャンプで、ここにヘリの発着場がある。

ここからヘリで、ハン・テングリやポベータの麓にあるB・Cまで約四十分で運んでくれる。パミール・キャンプよりアップローチははるかに短いことになる。

七世紀前半には玄奘三蔵がやって来たイスイク・クリ湖(大清池)にも案内してもらった。この湖はシルクロ

待を受けた。
新鴻からハバロフスクへ飛び、ハバロフスクから国内線でカザフ共和国の首都アルマ・アタへ向う。私はハバロフスクで一泊したが、ハバロフスクでその日の

ド派の垂涎の地でもあろう。噂に違わぬ美しい湖であった。カルカラ・キャンプからヘリで三十分、西方に飛んだところにある。

夏のわずか十日間の旅で宿願のハン・テングリ、ポベータ、イスイク・クリが眼前に開けた。短かったが、充滿した旅だった。

海外登山基金委員会

発足の経緯

標記委員会は、別稿の九月定例理事会議事録に記載の内容で設置されましたが、その経緯をご紹介します。

一、三国友好登山隊からの剰余金受入れ

同登山隊によるチョモランマ峰の史上初の交差縦走は、昨年五月五日、成功裡に終ることができました。その剰余金七千万円について、本年五月定例理事会で審議が行われ、次のとおり決定されました。

①剰余金七千万円の繰入れ
当会会計に繰入れを行い、海外登山のための「基金」として積み立て、有効活用をはかる。

②有効活用の方法
積み立てた「基金」の運用益を有効活用するために、別途、委員会を設け

海外の山

ククチカの死

イエジ・ククチカが、死んだ。

ラインホルト・メスナーに続き、八千峰十四座を総なめにしたポーランドの代表的登山家。ちょうど十年前、「初めての八千峰」としてノーマル・ルートから頂きを踏んだローツェ（八五一六峰）を、今度は「屈指の難ルート」と言われる未踏の南壁から攻略中の遭難死だった。

事故の詳しい状況は不明だが、外電その他が伝えるところによると、ポーランド、イタリア、スイス、フランス、ベルギーの五か国の登山家から成る国際隊の隊長として南壁に挑んだククチカは、十月二十三日、リヒャルト・ポウロウスキ隊員（三九）と共に、八三〇〇峰地点でビバーク。二十四日早朝、頂上アタックを開始したが、五十峰登ったところでスリップ、ザイルが切れ、滑落したという。

ククチカともあろうものが、ザイル切断で生命を絶つとは、というのが報を聞いての最初の印象だが、ポウロウスキ隊員は、無事下山しているので、どんな状況で遭難したかは、間もなくはっきりするだろう。

一九八七年九月に達成されたククチカの「全八千峰」が「超人メスナー」のそれを上回る、としばしば指摘されるのは、二つの理由による。メスナーが十七年かけて達成した（一九八六年十月）のに比べて、わずか九年でやってのけたこと、その登攀内容が、たとえば十四座中十座までが新ルートであり、四座が冬期であったなどメ

スナーをしのぐものだったこと、である。

しかし、メスナーが「第一番目の男」だったことは動かし難い事実である。ガッシャブルムやブロードピークを共にアルパイン・スタイルで登ったヴォイチェフ・クルチカなどは、ある時期「八千峰のピークハンター」に成り下がった、としてククチカの登り方を批判、以後ザイルを組まなくなったとされる。

実際には相当ハードなクライミングばかり実行してきたククチカとしては、不満な指摘であつたらう。十四座をなし遂げたククチカが今後どんな山登りを展開してゆくのかは、そんな要素もあつて関心の的だった。

そうした上での、ローツェ南壁である。

標高差三一〇〇峰のこの壁は、ヒマラヤに残された巨大な未踏の壁として、注目を集めている。一九八〇年春にはフランスのソロ・クライマー、ニコラ・ジャジェールが単身挑戦したが、遭難死、八一年には二十六人のユーゴスラヴィア隊が八一五〇峰地点まで達した。八四年春にはチェコスロヴァキア隊が南壁から右に出てローツェ・シャール（八四〇〇峰）の登頂に成功したものの、ローツェ峰への南壁からの登頂は持ち越された。八五年秋にはククチカ自身を含めた十一人のポーランド隊が八二五〇峰地点に達したところで断念、八七年秋にはポーランド隊が再度挑戦、八三〇〇峰の最高到達点を記録したが、雪崩で医師を失うなどで登頂はならなかった。

今回の挑戦は、四十一才になったククチカにとって、人生一步も後退せず、の決意表明とも言えたかもしれない。結果は、メスナーの強さ、しぶとさを強調するものとなったが、その気概は伝わってくる。

（江本嘉伸）

海外の山

その方法について制度化を行う。その制度と年度毎の活用計画案は、本委員会で作案をつくり、理事会で審議し決定する。

なお、本基金は既存の「登山特別基金」等の積立金とは合体せず、単独の基金とする。

二、海外登山基金委員会の設置

右記の趣旨に沿って常務理事会で委員会設置の原案づくり、委員の候補者選定が行われ、この原案をもとに九月定例理事会で決定をされたものです。

本委員会の任務は、海外登山基金の有効活用のための制度と、それに基づく年度計画の原案を理事会へはかることとであり、通常の委員会とは若干性格を異にしていると言えましょう。

なお、本基金に基づく第一回目の適用は平成二年度に予定されています。

(文責・西村政晃)

☆村井米子追悼集

寄稿三十七名 (一〇五頁)

☆川森左智子追悼集

寄稿三十八名 (一〇四頁)

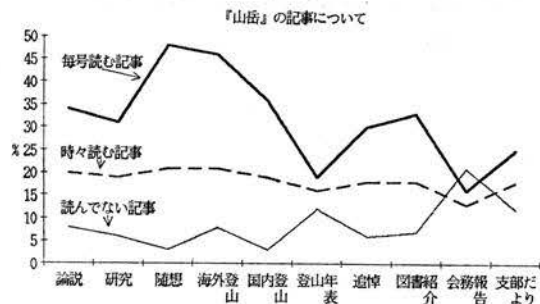
日本山岳会婦人懇談会有志編

頒価 各一〇〇〇円(送料 一

冊二一〇円、二冊二六〇円)

会員アンケート結果報告 (4)

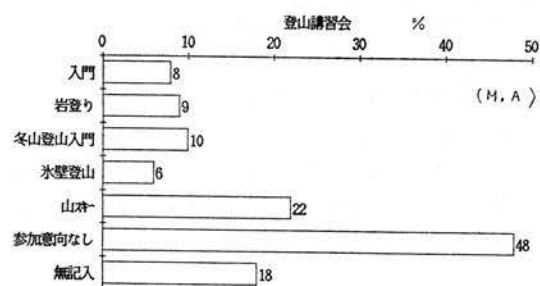
年報「山岳」は会報以上に読まれる記事と読まれない記事にバラツキがあることがわかる。今後、編集の参考の一つになろう。



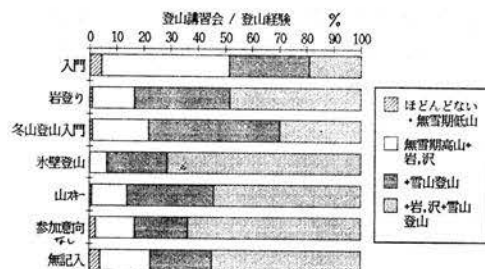
20. 登山講習会の希望

入門から山スキーまで 6~22% と講習希望者が相当いることが分る。なかでも「山スキー」は 22% もの会員が希望している。

「参加意向なし」が 48% というのは、8月号で紹介したとおり、オールラウンドな登山経験者が 56% であることから、リーズナブルと言えよう。

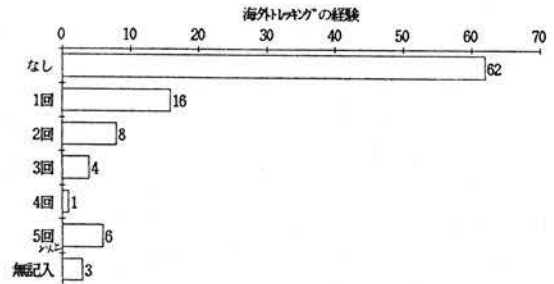


講習会毎に、登山経験の程度とクロスしてみよう。「岩登り講習会」~「山スキー」までいずれも、登山経験の程度の高い会員が多い。なかでも「氷壁登山」や「山スキー」はオールラウンドな登山経験者の希望が多いことが分る。



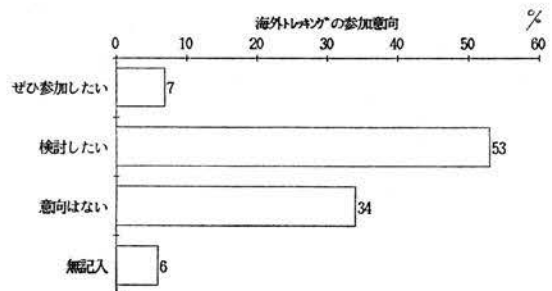
21. 海外トレッキングの経験

35% の会員が海外トレッキングを経験している。5回以上というヘビートレッカーは6%にも達している。



22. 海外トレッキングの参加意向

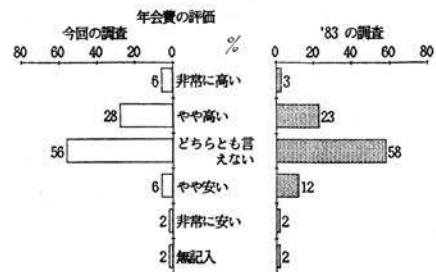
60% の会員が参加意向、参加検討意向を有している。



23. 年会費の評価

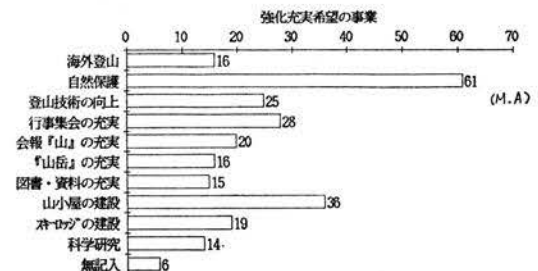
会費が値上りしたので、前回に比べ“やや高い”という評価になっている(「非常に高い」+3ポイント, 「やや高い」+5ポイント)。

この評価は時系列で把握してゆけば、会費改訂のタイミングを決める一つの参考資料にできよう。



24. 強化、充実して欲しい事業

「自然保護」が61%で群を抜いてトップである(前回の83年の調査も同様)。「山小屋の建設」が35%とそれに次いでいる。



25・自由回答

全回答数の約七分一にあたる三四〇件の自由回答があった。多かった内容は次のとおり。

・会報『山』の内容、編集に対する意見 55件

・年報『山岳』の内容、編集に対する意見 16件

・昨年のチョモランマ峰登山に対する意見 15件

・本アンケートに対する意見 13件

その他、当会の在り方への意見、要望、批判、事業活動への提言等、多岐にわたった。

まとめ

本アンケートは初めに述べたとおり、会員の半分という多くの参加がありました。しかも在籍年数等のデータを前回とつき合わせてみても、回答の偏りは見られず、全会員をほぼ代表していると言えましょう。

ご覧いただいたとおり、このアンケート結果には改善のための「答え」が直接には出ていません。当然のことですが、このアンケート結果を的確に読んで、当会の長期・短期の諸改善に役立てることが肝心となります。そのための「宝の山」ともいふべき貴重な「基礎資料」と言えましょう。

今後、このアンケート結果が当会の①長期の改善戦略づくり、②年度事業

計画策定、③会員の皆様相互のコミュニケーション等にひろく役立てば幸いです。

と考えます。(終り)
(文責・西村政晃、作図・小林政志)

岡茂雄さんのこと

丸山 尚一

楨さん、松方さんなど山岳界の長老たちと親交のあった岡茂雄さんがこの九月に、九十五歳で亡くなられた。明治二十七年に松本に生れているが、生涯、山を愛しつづけたのも、梓書房の名で山の名著の数々を世におくったのも、また松本に山岳博物館を設立しようといふほどの情熱を傾けたのも、松本を郷里にもった宿命のようなものがあつたのだらうと思つてゐる。

ひと口にいって、頑固一徹に生きた明治人といつていいだらう。誇り高く、そして正義感が強く、それでいて、絶えず優しさをもった人だった。ぼくは岡さんとは三十も歳は違つたが、不思議と気が合つて、おやじのような先輩でありながら友人のようなお付き合いをしていただいて忘れえぬ人である。もともと自由人であつた岡さんは、二十代半ばで尉官まで歩いた軍籍を断つて、人類学者の鳥居龍藏に師事してゐる。このころ知遇をえた柳田国男、新村出、濱田青陵、南方熊楠ら多彩な学者たちとの交遊が岡さんを育んだことはいふまでもなく、大正十三年に幅広い文化・人類学関係の専門書を出版する岡書院を創立する。晩年の著書『本屋風情』(第一回ノンフィクション賞)はそのころの交遊記録である。



(故岡茂雄氏・本年自宅にて)

続いて、山関係の梓書房を併設して、辻村伊助『スウィス日記』、楨有恒『山行』などの名著を多数出版したことは改めてここでもいうまでもないが、山の文学雑誌『山』を月刊し、今に続く『山日記』を創刊していることも特記しておきたい。

何といつても強く残つてゐるのは、

戦後間もないころ、山岳博物館の構想を熱く語つてゐたときの岡さんの顔である。弟が松本高校にいた関係から東京の家を焼かれたぼくは、軍隊から帰ると松本で生活することになったが、そこで疎開してゐた岡さんと再会した。ぼくをつかまえては、長年温めていた山岳博物館の構想をそれこそ情熱をこめて語つてゐた姿が忘れられない。当時、安曇に疎開されてゐた楨さんを支部長に日本山岳会の信濃支部が生まれたのも、博物館への支援がほしかつたことも当然あつたらう。岡さんの編集された支部報には、博物館の構想も発表されているが、何回か連載された松方さんの『アルプスと人』は、その後加筆されて岡書院から出版され、松方さんの名著になつてゐる。ウエストン祭が復活したのは信濃支部が動き、言い出しは岡さんである。また、茨木猪之吉さんの山岳画展を松本で開いたことも、対山館の百瀬慎太郎さんの信濃支部への協力も忘れられない。

山岳博物館の構想は、当時の松本市長も大いに賛成して市議会にもかけられたが、まとまる寸前に邪魔が入つて、結局、消えた。この山岳博物館が生まれていたら、松本市はもちろんのこと、日本の岳人たちにとつても誇りうるものであつたらう。今でも松本を訪ねるたびに残念でならない。県立、市区立

の美術館がそれこそ高額を費して各地に毎年のように生れているのに、山岳博物館一つ出来ないのはどういうわけなのかと訝る。国立の山岳博物館ぐら

追悼

元会員 犬飼哲夫氏

平成元年七月三十一日逝去、九十一歳。著名な動物生態学者で南極のカラフト犬で有名。北大名誉教授。去る八月十四日朝日新聞夕刊に本多勝一会員の書いた「流れ雲」を読まれた会員も少くないだろう。本会へは昭和六年一月伊藤秀五郎、角田吉夫、松方三郎三氏の紹介で入会、会員番号一二七七。昭和三十六年五月横さんが札幌に

いあってもしかるべき国なのに。山岳博物館の挫折は大きなショックで、凝集しきつた情熱が燃え尽きたように、岡さんは松本を離れた。戦後の

行かれた当時、加納一郎、館脇操、藤平正夫氏ら十一名と集まった折の記事は会報二一六号に載っている。当時会籍を離れていたが復活の希望があり、三十八年一月復活会員となったが、数年前からまた会籍を離れた。

『山岳』には「北海道の山の動物」(27-3)、「アイヌの作る山小屋」(30-1)の寄稿がある。(M)

訃報

鄭在泓 (CHONG JAE HONG)

会員番号九二〇九番(一九八二年九月入会)

韓国大邱市、啓明大学校医科大学学長(病理学主任教授)の鄭氏は、啓明大学ヒマルチュリ登山隊総隊長として、本年八月よりネパールへ出かけていたが、九月十四日急逝された旨、奥さまの季密来さんより連絡が届きました。

氏は韓国登山医学のパイオニアとして知られ、わが国にも毎年来

日される度に、北アルプス、南アルプスを登山されていた。また一九八七年十一月十三・十五日、信州大学で開催された国際高所医学シンポジウム(MATSUMOTO INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON HIGH-ALTITUDE MEDICAL SCIENCE)では、古原和美氏等と共に座長を務められた。本会は九月二十六日行われた葬儀に際し弔電を送り弔意を表しました。(Y・M)

わずか数年間ではあったが、岡さんが山岳博物館にかけた情熱は凄じいものがあつた。それだけにショックは大きく、ここで岡さんの山への情熱はぶつ切り切れたかのように、その後は表面に出ることはなかった。

〔編者注〕 本会元会員岡茂雄氏(会員番号二七一二番、一九四七年十一月入会。元岡書院、梓書房社主)は、九月二十一日急性心不全のため、杉並区成田東四一〇一〇の自宅で死去。九十五歳。告別式は二十五日正午から南荻窪の長明寺で行われ、本会からは望月名誉会員、大森常任評議員、丸山尚一会員等が参列して弔意を表した。



還暦セーターの はなし

入澤 郁夫

今年も多数の会員からの要望により、目下赤い還暦セーターを製作致しておりますが、このセーターにまつわ

このセーターが何時頃から作られ着用されていたかは定かではありませんが、以前一部の会員の間で還暦を迎えられた方が出ると仲間内でお祝いをしておられたようです。きつと当時は会でも若い人が多く還暦者は珍らしかったのかも知れません。還暦と言えば昔から当然赤いチャンチャンコを贈るところでしょうが、今どきチャンチャンコでもあるまいと赤いセーターを作ったのが始まりのようです。そして無類の器用人であった佐藤久一朗さん(上高地ウエストンのレリーフの作者)が編棒を動かし、一枚一枚手編で調製して贈っておられたようです。デザインも佐藤久一朗さんの案とうかがいました。もちろん費用は仲間が負担した訳ですから、若い人達はいままで待っても順番が廻ってこず、毎年取られる一方であった訳です。まあ無尽のような方法でお祝いをしていたのでしよう。ところが、製作者の佐藤さんが亡くなられ、この会も自然消滅してしまつたようですが、一部の順番の廻つてこなかった方達から苦情がでて、後を引継いでおられた山崎安治さんも大変に困って、職業柄アパレルを業としていて私のところに話があらつたわけです。そしてもう無尽のような方法は無理なので、欲しい人には実費で分けることにするから、何とか作ってくれと

依頼があり、'84年秋口に手掛けたのが最初です。しかしその時は枚数も少なくとても糸を染めて生産する訳にもゆかず、止むを得ず手編毛糸を使って家庭用編機で、いつも私共が試作をしてもらっている試作屋に頼んで作ってもらいました。

この時は佐々さん始め十四名の方が作られたと記憶しています。第二回は'86年で、今(西)寿さん始め六十一枚を製作しております。そして今回が第三回目なのですが、目下七十枚ほどの依頼を戴いております。このセーターは胸にカンガルーパーケットが付いており、そこにJACの文字と本人が還暦になった年号(西暦)が入るのですがこの年号がまちまちで今年の分を例に取ると'69年から'92年まで散っており、一番多い'89年が十五枚で、あとは各年一枚か二枚です。従ってジャガード等で文字を入れることができず止むを得ず、一枚一枚ポケットに手刺繍で文字を入れ、その後でポケットを取り付けるといふ、大変に手間とお金の掛る仕事をしています。どうか来永くご愛用戴きますようお願い申し上げます。

ネパール人ジャーナリ

スト二氏が来日

さる九月二十七日、わが国外務省の

招聘により来日したネパールのジャーナリスト二氏が当会を訪問しました。

「ライジングネパール」紙副編集長ラトナ・カージ・トラダール氏と「ネパール・テレビ」公社報道課長プリシビ・ラージ・チェットリ氏の両氏。

両氏はわが国の政治、経済、教育文化等の実情視察の一環として当会を訪問希望されたもので、当日は西村政晃常務理事、磯野剛太会員がルームで応待し、意見交換を行いました。

(西村政晃)

XCスキースキーのすすめ

田口 幸子

○XCスキースキー

クロスカントリースキースキーは、オリンピックの距離競技をマラソンとするならば、さしずめジョギングスキースキーといえる。XCスキースキーの本場であるヨーロッパでは、ダウンヒルスキースキーに劣らぬ人気のウインタースポーツだ。ニッカズボンにスパッツをつけ、アノラック、そしてリュックを背に、文字どおりカントリーをスキースキーでクロスする。

○冬の山歩きの原点

北欧でのXCスキースキーの歴史はながい。もともとは冬の季節の交通手段であったのが、雪で他のスポーツができない季節に、人々がスキースキーをはいて、

野山を歩きまわったのが原点だ。

オーストリア、イタリア、スイス、フランスなど、冬場のスキーリゾートには、かならずXCスキースキーのコースがある。スイスアルプスやドロミテの山々のふもとを、XCスキースキーで歩きまわった時の気分は、まさに最高。

○XCスキースキーのレース

雪のある間は、ほとんど毎週末にXCスキースキーのレースがおこなわれている。フィンランドの七五・レース、スウェーデンの八九・レース……外国からも参加して、二万、三万もの人々が雪の上を走る。記録を競う選手もいるが、でも、だいたいは、長い距離を友だちと喋ったり、途中で弁当を食べたりしながら、気持ちよく雪の上で時間を楽しむ。

○日本でも出来ます

最近では、どこの町、どこの村でも、朝夕走っている人をかならず見掛ける。そして、ジョギングクラブの類が、日本全国どこにでもあつた。そのジョギングクラブの数と同じくらいXCスキースキークラブのあるのが、北海道。だからレースも多い。

本州では岩木山、裏磐梯、日光の光徳に、長野県では、妙高、乗鞍高原、尾瀬もいいし、上高地もなかなかです。

昨冬は、どこも雪不足で、準備は万

端だったのですが、中止になってしまったチエコスロバキアでの二十四時間XCスキースキーレースに、来年はぜひとも出場するつもりです。主催は地元の出岳会、ヘッドランプをつけてまる一日走るレースです。

機械(リフト)で吊り上げてもらって、あとは、下り坂をただすべりおりるだけのグレンデスキーよりも自らの足と手でひろいカントリー(雪上)を、悠々と歩いてみませんか。

松方、西堀両先輩との出会い

の出会い

斉藤 健治

先夜(四月八日夜)ルームで島田、田口両名誉会員による「松方三郎の山と文学」と題する講話を大変興味深く聞いた。その話を聞きながら、私は当時の最高知識人と言われた松方さんとの初めての出会いを思い浮べていた。田舎に帰って、あれはいつ頃だったろうとそんな事を考えていた矢先の十三日の夜のテレビで西堀さんの訃報を知った。

昭和二十七年夏のことだったと思う。或日突然日高さんから日本山岳会の人達に会いたいといっているから会ってやって下さいといつて来た。当時私は本邦に留学する外国人学生の世話

をする外務省の外郭団体である国際学友会に勤務していた。日高さんは同会の理事であった。

定められた日に金沢常務理事と総主事の私が、たしか八重洲口の前の小料理屋だったと記憶するが、に何った。同席されたのは記憶に間違いがなければ、日高、松方、西堀、加藤(泰)、島田、辰沼、工場の諸氏であったと思う。或いはもっといたかもしれない。これが松方、西堀さんをはじめとする皆さんとの初対面であった。

実は日本山岳会ではヒマラヤのマナスルに登山隊を派遣すべく準備中であるが、そのためにこの二月ネパールに行ってきた。ここにいる西堀氏が先方と二名の留学生を日本に招致するとの約束をしてきた。ついてはこの二名の留学生を国際学友会で引受けてくれなにかとの申し出であった。学友会は戦後政府補助金を打切られ、やっとこの年僅かばかりの補助金が復活したばかりだった。戦前、戦時中は多数の留学生を招致したり、奨学金を支給したりしていた。例えば昨年本会の名誉会員になられたイタリアのフォスコ・マラニニ氏も招致学生の一人であった。しかし今はとてもそんな余裕はない。その点について心配していると、松方さんが費用は全額山岳会がもちますという。留学日程等についても出来るだけ

【自然保護随想】

追良瀬行に想う

—青森県白神山地—

川底の石の一つ一つが透明な水を通してくつきりと見え、時折魚影がキラリと走る。水面は陽にきらめき、草鞋ばきの足に冷たい水の感触がなんとも言えず快い。兩岸を仰ぎ見れば、ブナやサワグルミ、カエデの巨木がびっしりと山肌を覆い、夏の太陽を受けて緑に輝き、青空に白雲がまぶしく浮かんで、追良瀬はいのちの喜びに溢れているようだ。

山の友は林に入って行っただけで腕いっぱいミズを抱えて現われ、或いは両の手にヤマワサビを掴んで出てくる。倒木にヒラタケを見つけ、川原の石をひっくり返してカワムシを捕え、それでイワナを釣る。「カツラの下には水がある」の定説通り、カツラの大木が傘のように枝をひろげているその下には、岩の間から清冽な水が湧き出していて、私達ののどを潤おしてくれる。正に甘露！疲れば石を枕にせせらぎの音を聞きながら昼寝する。ふと前方を見ると、シノリガモの一家が流れをただよいながら川をのぼってゆく。

川原に焚火をしてイワナやアユを焼き、海に潜って採って来たというモズクにヤマワサビを添え、ミズの油いため、ヒラタケと小指ほどのタケノコのたっぷり入った味噌汁など、満ち足りた思いの夕餉の一刻、アワビやアユを採って小遣いにした子供の頃の話、林道ができるまではウヨウヨいたというイワナの生態、マイタケやナメコの話、山菜の料理法、秋の紅葉の美しさ、水の冷たさ、海でサザエやウニを採る楽しさなど、山人の話はいつ果

てるとも知れない。焚火の煙は夜空に立ちのぼり、その先にこぼれるばかりの星が輝いていた。

こんな豊かな自然の恵みは、今の日本には殆どなくなつてしまった。ブナの森が作り出す豊富な水、それによつて産み出されるさまざまな海山の幸、大昔から人々はその恵みをいっぱいを受けて生きて来た。山の友は「ブナ林は火事になりません。燃やそうだったって燃えませんよ」とも言った。大雨による増水も緩和される。数年前、赤石川を遡行した折、ブナ原生林の中を二ツ森へ登る最終日は激しい雨となった。原生林の雨は繁った葉に降りそそぎ、したたり落ちた滴は太い幹を伝って流れ落ち、落葉の厚く積ったふかふかの大地に音もなく吸い込まれてゆく、それが、稜線を越えてブナの伐り尽くされた秋田県側に出ると、降った雨はそのままむき出しの土砂をまきこみ、濁流となつて道路を奔り降る。その激しい対照をまのあたりに見て、非力ではあつても、森林保護の声をあげ続けてゆかなければならないと感じたものであつたが、この夏の追良瀬行でもさらにその思いを強くした。

この白神山地にも山の植物を根こそぎ掘り取って高く売る者や、学生アルバイトにイワナを釣らせて儲ける商人も横行しはじめている。春秋林道工事は、ブナ林を愛する人々の強い反対で、幸い今の所ストップしているが、完成した林道の終点二ツ森に立つて、見事に伐採された秋田側を見おろすと、これがあの豊かな恵みをもたらすブナ林の変り果てた姿か、と息をのむ思いがする。カモシカもクマも生きる残された白神の聖地を、なんとかして美しい姿で後の世に伝えて行きたいものである。

(中村あや)

面倒をみるとのことであつたので、話は簡単になった。宿泊費と食費などで一人月額二万五千円、二人で五万円というところでお引受けすることになった。かつ身元引受人は日本ネパール文化協会、後の日本ネパール協会とし、工業氏が当分の間その任に当たることとなった。そして二人の留学生の来日は年末とのことであつた。

二人とはクリシュナ・バハドール・バルマ君とラナ君であつた。

予定通り羽田に着いた二人は早速新宿柏木の国際学生会館に宿泊することになった。修学目的を尋ねたら、クリシュナ君は家内工業でラナ君は自動車修理とのことであつた。

二人は真面目にそれぞれの研修に励み問題は一つなかった。学費はきちんと文化協会を通じて支払われていた。工業さんは京大を辞めて衆議院の専門調査員をされていた。それで時には学費を受取りに衆議院に足を運んだ。と同時に文化協会の今後の在り方などについて話合つた。一年余過ぎてから工業さんも忙しくなつて来たのか直接松方さんの所に受取りに行つてくれとの話だったので、日比谷の共同通

信社の専務室に伺うことになった。暑い時はYシャツを腕まで捲つて、ご苦労様といつて、無造作に金を渡してくれた。偉らぶらない人だなあとその時思った。それから度々日比谷へ伺うことになった。そのうち支払いが遅くなり始めた。

昭和三十年十月クリシュナ君は帰国することになった。ラナ君はそれ以前に離日していた。結局十万円が未払いになつてしまつた。

後年私が日高さんの紹介で山岳会に入会して、松方さんや西堀さんとなる席上でお会いしたら、君は酒が好きなんだからといつて、杯を満たしてくれたのがいまだに忘れられない。あの頃は皆若かつた。

二人のネパール留学生の学資はどこから出たのだらうと今もって不思議に思つてゐる。恐らく松方さんや西堀さん達有志が、なんとかしてヒマラヤに行きたいとの一念から、それぞれポケットマネーをだしあつたのではなからうか。

それから西堀さんには特に日ネ協会のことで生前いろいろとご指導をいただいた。また同じく日ネ協会のことで

タンボチエ僧院の再建に協力しよう(一口、五〇〇〇円)

松方さんのご子息七郎さんのお世話になつた。奇しき因縁と言わなければならぬ。

松方さんが死去されて十五年、今また西堀さんが鬼籍に入る。感慨無量なものがある。(一九八九・四・一六)

短歌

仲秋の鹿島が岳縦走

大谷 優

ふかき霧真つただ中を昇りゆく色鮮やかなテレキャビンよ

飛び立たぬ雷鳥いとし近寄れば頭かしげて霧に消えゆく

霧流る信濃路から越中へ分水嶺の岨路ほそし

五龍尾根歩けど遠し鹿島槍ゆけど離れじ剣と雄山

えぐられた八峰キレット登りゆく流れる汗の冷たくなりて

仰ぎ見る鹿島槍岳こんべきの空に立ちたりいただき近し

冬支度急ぐな山よ峰々よ素顔かくすな雪降るなかれ

雪とけて種まくという大町の人が語り継ぐここ爺ヶ岳

みどり満つ後立山つらなりて山燃ゆる秋いまだ遠けり

いくたびか相いまみえる梓川流れに見ゆる小石白かり

ウエストンの

オベリスク登頂年

田畑 眞一

深田久弥氏は鳳凰山(二八四一)の地蔵仏岩、つまり通称オベリスクに関して「その巨岩に初めて攀じ登つたのはウォルター・ウエストンで、明治三十五年(一九〇二)の夏であつた。(深田氏『日本百名山』と述べている。

しかし、この登頂年は誤りである。これはウエストンの記録(『極東の遊歩場』)を調べれば、おのずと明らかになることで、一九〇七年(明治三十一年)である。一九〇五年には北岳(三九二)へ登頂しており(前掲書)、これとの混同なり勘違いが考えられる。なお、『日本百名山』は昭和三十一年に刊行された。

いうまでもなく深田氏の関係書は、当時、洛陽の紙価を高め、阿部恒夫氏

も「すぐれた紀行的文学である」(『世界山岳百科事典』)と評価した。今なお百名山の呼称は世に伝わり、またこれが出版界に書誌的影響をあたえた事実(拙稿「日本百名山以後」、『山書月報』三一六)も否めない。誤りが世に伝えられていくことを懸念し、あえてひとこと申し上げておきたい。というのもすでに事典類ですら、それも地元山梨県に関するものにまで(『山梨県百科事典』)誤りがみられるからである。すなわち「地蔵仏に最初に登ったのは黒人ウエストンで、一九〇二(明治三十五)年の夏」と紹介しているからである。黒人ウエストンというのは何とも奇妙である。異人の誤植としてもおかしい。いずれにしても誤りであり、英人ウエストンと書かれるべきである。なお、『山梨県百科事典』は昭和四十七年に刊行された。

さて、こうした事蹟については、島田巽氏をはじめ、川村宏・三井嘉雄・安江安宣の諸氏がまとめられた年譜『W・ウエストン年譜』、『山岳』第八十二年・同八十三年)をこそ尊重すべきだと思う。つまり、これを典拠とする考え方を広めていくべきである。



模先生を偲びて

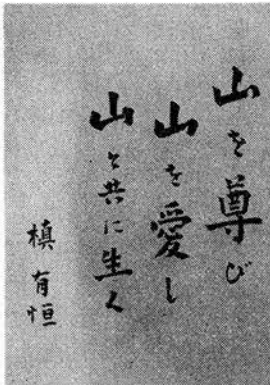
月原 俊二

尊敬する模先生とは四度程お近づきをいただいています。九州路には滅多にお下りの機会もなかったようです。

先生の銘言に

“山を尊び 山を愛し 山と共に生く”

をご揮毫下さった複写写真と、貴重な



紙面をお借りして、先生の肖像写真をご披露させて頂いています。肖像写真の方は第六回国体伯耆大山の元谷にて三五「カメラで撮影のもので、非常に先生もお気に召したのか、その後出版された単行本『山行』の口絵にご使用いただいたものです。

銘言は戸畑の西日本工業倶楽部での昼食会にてご揮毫を願ったものです。マナスル成功祝賀会(毎日主催、岳連主管)、門司区背北の風師山頂での小学生を集めての山頂講話、九重山湯坪の製鉄所経営「九重山荘」での会合等、縁無きものと思えないのです。

毎年いただいた「謹賀新年」の年賀状も平成二年から拝受出来なくなり淋しい極みです。

『花と氷河の旅』

オーストリアの

エーデルワイス

今夏も第十三回ヨーロッパ・アルパイン・ツアーは、去る八月九日から二十日まで、全行程晴天に恵まれて四十名の一行は、スイス・オーストリアの山と峠、アルプのお花畑、オーストリアのグロスグロックナーの氷河歩きをして「花と氷河の旅」の目的を果した。ツエルマットから毎年登るオーバー

ロートホルン(三四一五m)の斜面やシュワルツゼー付近のエーデルワイスは、今年も清純なアルプスの星の輝きを見せてくれて、始めて見た人達は感激の内に、花の写真を撮るのに夢中であつた。

人数が多いのでレベル別にコースを選び、強い人達は山や峠に登り、ゆっくり楽しんで歩きたい人達は、高原のお花畑をのんびりと写真を撮りながら歩くコースへと、それぞれ楽しんでいただくようにしているのだ、高山病や疲れる人も無く、マッターホルンへ何百回も登ったという、毎年同じガイドが同行してくれるので、安全に歩くことができるので安心だ。

今年のハイライトは、何と言っても最終コースのオーストリア・ハイリンゲンブルートの谷を廻り、グロスグロックナーの氷河歩きと、氷河左岸の山腹にひろがる高原で、新しいエーデルワイスの群落に出会ったことであつた。

私達はハイリンゲンブルートのホテルに一泊して、翌日七年前に訪れた時と同じガイドのハンスのリードで、氷河へ行く途中の彼の持山の牧場斜面に登り、新しいエーデルワイスの群生地を、朝露に輝く大型の立派な花を接写できて、思いがけぬお花畑に歓喜した。そこから少し先のケーブル駅から氷

河に下って、全員氷河の上を慎重に踏みしめ、青氷のクレバスを覗いたりしながら、幅三・、深さ一八〇の氷河を一時間位歩いた。始めて氷河を踏んだ人達は、

「正に花と氷河の旅だ」と、大感激であった。

「人の心があれほど完全に結実した一日はなかった」と感動の言葉を頂いたが、私も嬉しかった。

これも好天に恵まれ、良きメンバー、親切なガイド、そして雄大な自然と人との出会いがあったからこそ喜び合って帰途についた。(坂倉登喜子)



図書
紹介

天狗と修験者

宮本袈裟雄著

標題にある「天狗」については、全頁の四分の一を使って『今昔物語』『御伽草子』ほかの文献や伝説などを参考に、「鬼」についての実像とともにその正体をさぐっている。

このような山の異人を追求すると、そこには山岳信仰につきものの密教や修験の行者たちが浮んでくる。著者はこうしてその元となる山岳信仰へと筆を進めていく。

山岳信仰を代表する修験道の実際を尋ねるため、石鎚山行者の場合、千日回峰行を達成した僧侶の例も合せ、恐山などで行なわれている民間信仰の様子にも逐一考証を重ねる。そして山岳にかかわる信仰者の修行と、彼らの庶民救済の事例にも焦点を当てながら、山岳信仰の実像に迫ろうとしている。

巻末には「山岳信仰アラカルト」として、山岳信仰にかかわる山、三十山について説明があり、この方面に興味のある者にはたいへん便利である。一九八九年三月、人文書院刊、二二六頁、定価一八五四円(岡沢祐吉)

阿蘇万歳

内野 望著

朝焼けの雲海、夜明け、噴煙、一葉の写真が饒舌に阿蘇を語る。雄大な阿蘇の自然に魅了され、追い求め続けた人でしかとらえることのできない大自然が目の前に広がる。

熊本在住で銀行勤務のアマチュアカメラマン内野望氏の、前作『阿蘇』に続く二冊目の写真集である。昔、多く

の人が見て感嘆したであろう阿蘇の風景を、今のうちにできるだけ撮り残しておきたいと、十八年間撮り続けたフィルムの中から九十七枚を選んで収録している。

阿蘇の四季の自然の中で時間をかけて待ち続け、最も美しい一瞬の表情をとらえた写真を見ていると、いつしか写真の中に引き込まれる。雄大な自然に対する作者の深い祈りが込められているようだ。

写真家前田真三氏は巻頭に寄せた文で、阿蘇を知り、阿蘇を見つめる心、そして内野さんの阿蘇に寄せる愛情があつてこそ成し得たものであらうと、たたえている。

一九八八年五月 B判変型 西日本新聞社刊 写真九七枚 定価三千九百円 (田上敏行)

裏山の博物誌

三宅 修著

三宅修著『裏山の博物誌』を本屋で見付けた。藤紫のパステルカラーが装丁に使われ、『アルプ』の編集長として地歩を築いた著者にふさわしい瀟洒な本であった。手に取ると、カバーの裏にギフチョウと覚しいイラストレーションがあつて、そこに釘付けになった。なぜ、わざわざ裏返しにしたのか

とまどったからである。どうやら蝶の紋様の濃淡をあべこべにしたためらしい。私の好奇心は、こうして『裏山の博物誌』に吸い寄せられていった。

三宅修さんは、東京から相模湖畔の藤野町に移り住んで十五年。著者が自宅近辺の四季の移ろい感じながら、動物・植物・鉱物・地質、天文、さらに、音楽・文学と多岐にわたって観察し、味わっている。私には、博物誌でありながら思索の本にも思えた。博物学を愉しむ心得。自然界のあらゆるものに興味を抱くこと。が、具現され、上品で読み心地のよい文章が綴られている。

本文は、一月から始めて十二か月に分かれ、歳時記風に「裏山」の息使いを伝えている。毎月の冒頭では、ですます調の書簡体で読者を博物誌の醍醐味の中へ誘導する。「風が裏山の雑木林で口笛を吹いています」。ひと膝のり出して読み進むと、耳元で幕明の序奏が歌い出す。私には、忘却の彼方から手繰り寄せた憶い出。プラネタリウムが映す夜空の輝く星を心まわつて、聴いた弦楽四重奏曲のようであった。さて、幕が上ると文面は、たちまち表現に頓着したですます調となる。口絵八頁、三十一カットのカラー写真で構成されている。元来プロフェッショナルの写真家が、ナチュラリスト

としての視点で写しとめていて見事。いっそうの好感が持たれたのは、ふんだんに挿入されているモノクロームの写真であった。まさに光画であった。

あとがきで、裏山の谷に県の産業廃棄物処理場の建設計画を前にして、この自然の恩恵を忘れた人間のおごり……。緑と水と生命を護る、そんな私の願いもこめられている、と結んでいる。好著、一読をすすめたい。

一九八九年六月、山と溪谷社刊、B六判、二五六頁、定価一八〇〇円

(中村太郎)

小坂の三角点

小坂町教育委員会編

岐阜県小坂町教育委員会が調査委員会をつくって作成した本である。昭和六十二年五月から六十二年六月にかけて、小坂町にある三角点全点を確認した。

小坂町は御嶽山の摩利支天を含む山域をもつ御嶽山麓の町である。三角点は千以上のものが三十点、千以下のもものが四点である。

この仕事の前には、小坂町の滝を集めた写真集が発行されている。この時にはそれまで知られていなかった滝もいくつか発見している。この調査で使った国土地理院の地形図に感銘を覚

えてこの企画になったという。

三角点は一歩一歩歩いて確認し、草を刈り、周辺を清掃して写真を撮って写真集とした。三角点に到る道は、一般道も路跡もないものが多く、丈余の笹になやませられることが多かった。一度で標石が発見出来ず、再度登山しているものもある。

写真集は、すべての三角点について、最初に「点の記」を掲載し、三角点に到った簡単な調査経路と概念図と地形図によって位置を示し、三角点周辺の植生を、植物名と写真によって紹介し、次に三角点のある山の全容を写真で示して、新点の記と称して短い散文が添えられている。小坂町の一等三角点は明治二十七年に、また、三等三角点は明治三十八年に設置されたものである。

御嶽山の摩利支天に登山した時には、六月半ばであったが、山頂付近で吹雪に見舞われたという。点名は御嶽山の剣ヶ峰が「御嶽山」、摩利支天が「御嶽」となっている。剣ヶ峰は区域外となる。

巻末には小坂町の水準点も収録している。その他に、飛騨出身の朝日新聞社友の荒垣秀雄氏、国土地理院中部地方測量部長、町長、教育委員長等が文を寄せている。

先般、今年はじめて制定された六月

三日の「測量の日」にちなんで、測量、地図に関する功労者に対して建設大臣表彰があり、選に入らなかったが、その候補の一つとして、この本も話題に上った。

A4版全ページアート紙で、写真は鮮明で、三角点に興味をお持ちの方々には楽しんで読める本であろう。

何よりこの本製作の労をねぎらいたい。

一九八八年十一月一日発行 著作権者 岐阜県益田郡小坂町 定価六〇〇円

HIMAL

HIMAL ASSOCIATES

編集発行

八八年七月に創刊された四十頁前後の雑誌で「開発と環境のため」と副題が付され、八八年十一月・十二月の第二号以来隔月発行となっている。

非営利団体のヒマール・アソシエーツがヒンズークシからチベット、ブータンを含む広域ヒマラヤ開発に関係する住民の健康・経済・環境・文化について一般の人々が討論と行動を起こすために話題を提供する目的で発行されている。

それぞれの山地住民の生活に直接影響を及ぼす森林伐採・道路・ダム・発電所等の開発と環境問題・生活・教育

福祉・移住・登山等広い範囲で話題が提供され、現在のヒマラヤ地域の動向を知るには興味深い読みものとなっている。

登山関係についても各号話題が提供されており、我々のように外国からの登山者が無意識のうちに彼等の社会を傷つけていることを思い知らされる。

因みに八九年一・二月号では八八年秋サガルマタに登った米国籍がクーンブ水河のルート作費二八〇〇〇ドルを後続の登山隊にも負担するよう要求し山の中で仏隊が五五〇〇ドル、ニュージーランド隊が七〇〇ドル、仏別動隊が五〇〇ドル支払った。この行為に多勢の米国籍シェルパが抗議し、米国籍のリーダーに山に登りに来たのかアイスフールで金儲けに来たのかと迫り数日間下山したと当時の仏隊リーダーが報告している。

八九年三・四月号では「季節はずれにピンクの花々がエベレストBCへの石楠花街道に咲いていたがよく見るとトイレ用紙であった。」から始まる一文。残飯・空缶・プラスチックで汚したヒマラヤの美化運動にふれている。

八八年十一月・十二月号では中・日・ネ三国友好登山結果についてかなり手厳しい評価をしている。

図書紹介欄では海外を含むヒマラヤ関係の近刊書が紹介され情報集めに役

立つことでしょう。

(南井英弘)

〔編者注〕雑誌『ヒマール』定期購読

(年間六冊の購読料25米ドル) 希望

報告

「山研を考える集い」報告

山岳研究所運営委員会

本会唯一のクラブヒュッテである山研は今さまざまな問題を抱えている。

既に建物・設備は老朽化し、使い勝手から言っても時代のニーズに合わなくなっている。加えて利用者も暫減或いは横ばい傾向にあり、会の負担金も馬鹿にならない額にのぼっている。上高地という絶好の場所でありながら、その利点を活かし切っていない。

そこで、どうしたら快適で楽しい山研生活が出来るか、また、将来の山研の理想像とはどんなものなのか、それらを模索するため、八月二十六日現地で、集会委員会、婦人懇談会の共催という形で「考える集い」を催した。地元からや東京、大阪からの参加者を含め二十六名。夕刻から約二時間にわたる、全員熱心に意見を出し合い、それなりの成果があった。ここにその要点を記して報告したい。

一、どこに問題があるのか

まず考えられるのは、交通の便が良くなり過ぎたことであろうか。もはや上高地は旅の通過点であり、登山の基

者は左記へお申込み下さい。

◎〒204 東京清瀬郵便局私書箱九号

ヒマール日本連絡所

地ともなり得なくなっている。これは地元の旅館とも共有する悩みである。

次に山研の設備の問題がある。炊事場が使いつらい、風呂、トイレが男女共用である。個室がないから幾つものパーティを一度に泊めることは出来ない。管理人室の湿気がひどい等々。また、山研の存在が意外に知られてないのではないか、呼称から想像して宿泊施設ではないのではないかという誤解等。さらにサービスの面では食事の提供、PRの不足等々。

二、どうしたら良いのか

例えば料金の見直しをして食事の提供をする。二段ベッドを備えて収容人員を増やす。冬期には撤去可能な炊事場を屋外につくる。呼称を変える。会報を利用してもっとPRをする等々いろいろの改善案が出されたが、いずれも根本的な解決策とはならない。例えば湿気の問題、トイレの共用の問題はどうしようもない。ここは思い切った抜本的に建て替えをして不備な点を改善すべきだという意見も出された。

三、あるべき山研の姿

単なる宿泊施設ではなく、公けにも開かれたセミナーハウスのようなもの。岳人の国際交流がますます盛んになろうとする時代における日本山岳会の応接間としての機能を果たし得るもの。このような山研を追い求め、実現に向けて模索することは今の我々の責務ではないだろうか。

短い時間ながら、内容の濃い意見交換であった。もちろん結論を出すことを目的とした会ではなかったが、山研委員会としては、ひとつの方向付けとして出された建替えの問題について、これから鋭意議論をし、実現の可能性を探ってゆきたいと思う。

(出席者・順不同) 河野幾雄、河野之保、赤羽孝一郎、宗實慶子、柴田篤志、松田雄一、菅野キヨノ、前田清子、里見清子、中澤慶子、入澤郁夫、穴田雪江、小倉董子、熊谷とも子、羽賀育子、黒沢通子、小倉茂暉、太田晃介、上條岳人、岡部みち子、中村太郎、奥原宰、継松久美男、井野千枝子、溝口洋三、石橋正美 (石橋正美)

ビアパーティ

婦人懇談会

夏の終りを告げる行事の一つでもあ

る婦人懇談会主催のビアパーティは、九月二日(土)五時より日本山岳会集會室に五十五名の会員を迎えてなごやかに始った。

恒例となった開宴前のショートスピーチには、今年の夏カナダの旅を楽しまれた今井喜美子さんをお願いした。

二十年程前カナダに出掛けた時に、お土産として差上げた舞扇が、今でも大切に壁に飾られていて感激されたこと、禁酒国カナダではビールが飲めなかったことなどを話されてから、「今日は皆様と共に夏の思い出を語りながらビールを飲みましょう」とお話を結ばれたところで、生樽の栓があげられて乾杯となった。

いつもながらの飲み放題・食べ放題の盛りたくさんのお料理に海外からのお土産まで仲間にはいって、立つ人・座る人、夏山の思い出話に歓談の輪があたりこちらにできて、テーブル狭しと並んでいた料理もそれぞれの胃袋に納まって、居並ぶ人達の顔色もよくなり一段と賑わさも加わってきて、ビールの栓をぬく手にも力がこめられた次第であった。

過ぎゆく夏から秋の山行計画といつまでも話題はつきないけれど、次回の忘年会に再会を約束して、楽しかった平成元年度のビアパーティも七時半には閉会となって、きびしい残暑も夜に

なっていくらか涼しくなった街へと帰路についた。
(里見清子)

三水会現地集会報告

三水会では恒例行事となった「上高地山研でアンコロ餅と薬湯の集い」を九月九日、十日、二十二名参加して開催した。九日新宿発七時三十分あずさ

今回は勝田さんが床上浸水のあと整理のため参加できず、手品など話題にかけたのは残念でした。翌十日は皆さん元氣にお目覚め、なめこ汁ときこの飯で朝食をすませて現地解散。最初に久保さんが西穂岳に出発、焼岳、乗鞍岳、穂高岳、徳本峠それぞれ目的の山に順次出発した。帰京組も十一時過ぎ上高地をあとにした。

参加者 荒木正弘、伊藤信夫、岩堀瑞子、乾能尚、内山城、小野利次、岡野誠、川上光久、菊地文雄、久保孝一郎、小林碧、坂倉登喜子、斎藤健治、高田真哉、田久保勇治、滝沢ちよ子、遠田栄、遠田篤子、中村久美子、広羽清、平戸孝夫、平井拓雄 (田久保勇治)

都立大学牧野標本館
小林純子先生と
鎌倉の山を歩く会
婦人懇談会主催

十月一日秋晴れのもと、植物探索会が、鎌倉の源氏山周辺で行なわれた。午前十時、鎌倉駅の江の電口に集合。出席者名簿に名前を書き込んでいると小林純子先生が、颯爽と紺色の帽子をかぶってお見えになる。時計塔の下

のヨメナや、小指の爪ほどもないキツネノマゴなど、名を覚えればなおさらのこととおしく思えてくる。そして、見つけて嬉しい双壁は、花となんといっても秋の味覚。鈴なりの銀杏の下では少々うるつき、臭いものそのとリュックに押し込んできた。さっそく家で塩炒りにし、翡翠色の実を楽しんだ。残りは茶碗蒸しに入れて、鎌倉の秋を味わえたのは大きな余録であった。たわわに実った栗の太木の方は、残念ながら時機尚早で、きつと枝から枝へ走っていた台湾栗鼠たちの食卓にのぼるのだろう。

十月一日秋晴れのもと、植物探索会が、鎌倉の源氏山周辺で行なわれた。午前十時、鎌倉駅の江の電口に集合。出席者名簿に名前を書き込んでいると小林純子先生が、颯爽と紺色の帽子をかぶってお見えになる。時計塔の下

のヨメナや、小指の爪ほどもないキツネノマゴなど、名を覚えればなおさらのこととおしく思えてくる。そして、見つけて嬉しい双壁は、花となんといっても秋の味覚。鈴なりの銀杏の下では少々うるつき、臭いものそのとリュックに押し込んできた。さっそく家で塩炒りにし、翡翠色の実を楽しんだ。残りは茶碗蒸しに入れて、鎌倉の秋を味わえたのは大きな余録であった。たわわに実った栗の太木の方は、残念ながら時機尚早で、きつと枝から枝へ走っていた台湾栗鼠たちの食卓にのぼるのだろう。

コース説明があり、「それでは参りましょうか」という先生の一声で、デイバッグを背にした二十名の小集団が、ベンに手帳も携えて動き出す。
裏駅前の紀ノ国屋を右に曲り、車や観光客の比較的少ない今小路を進む。山に入ってからとばかり思っ、呑気にお店を横目で眺めていると、道端の名もない雑草を指さし(本当は、名もない草などはないのだけれど)「はい、これはメヒシバですね」首から下げた金色のルーペで確認なさり、「やつぱりこれはメヒシバ。オヒシバの穂と少し違うんですよ」と、詳しいご説明が続く。二・三おきに次から次へと新しい草が登場し、道の右へ左へ行ったり来たり行列がしばらく続く。寿福寺、英勝寺を通り過ぎ、海蔵寺方面へ曲がると、いよいよ化粧坂となる。日向の秋草から一変して、しだの類が多くなる。アジアンタムにそっくりなのは、可憐なホウライシダ。葉の切れ込みの間がゲジゲジになっているのはゲジゲジシダ。表裏の区別のつきにくいリョウメンシダ。覚えてた特徴のあるシダを見つけてゆくのは楽しい。葉を裏返し、胞子のうの付き方のさまざまについてご説明があったり、理科の野外観察ながらであった。地味な野草の中で、やはり眼を惹くのは、日溜りにそっと咲く花達である。うす紫色

お天気にも恵まれた初秋の鎌倉の植物探索会は、ここで、すだく虫の音に送られ、落葉を踏んでの散会となった。

会務報告

九月理事会

九月十四日、十八時三十分
場所 本会ルーム

出席者 山田会長、村木、藤平両副会長、松田、西村、織田沢、早坂、小林、入沢、穴田、小倉、関口、松本、伊丹、石橋、藤井の各理事 小倉、大島、鳴原、橋本の各常任評議員
(委任出席) 山本、重広、藤本の各理事 太田、飯野両監事 平林、大森両常任評議員

▽議事

山田会長の挨拶の後、八月、九月常務理事会の報告が行われ、審議事項に入った。

審議事項

(1) 海外・青懇、遭対各委員会の委員追認ならびに運営方針につき、それぞれ説明があり、承認した。

これをもって十九の全委員会の全委

〔参加者〕 講師：小林純子 鳴原一男、佐野加代子、水村通子、穴田雪江、大塚玲子、河野幾雄、長谷川英夫、長谷川紀子、里見清子、川合愛子、小原晴子、小原勝郎、高本信子、杉山都子、野々口文子、広島初子、兵頭正光、高橋実万、高橋淳、芳野菊子 (高橋実万)

員延三六二名が決定した。重複している者を整理すると、委嘱状発行数は二一三通となり、本日完成した「役員・委員名簿」と共に各委員宛送付することにした。

(2) 海外登山基金委員会設置の件

九月の常務理事会でまとめた原案について、西村理事より説明があり、検討の結果、承認、九月十四日付をもって本委員会は発足することになった。

(別掲解説記事参照)

委員会の概要、構成メンバーは左記の通り。

● 名称：海外登山基金委員会

● 目的：海外登山基金の運用益を有効に活用することにより、海外登山の振興をはかる。年度毎の活用計画は、本委員会作成の原案を審議決定する。

本予算は一般会計の中に包含する。

● 構成メンバー：委員長は副会長が当り、他の副会長、総務、財務、高所登山担当常務理事各一名の外、学識経験者若干名をもって構成する。委員の任期は二年(再任は一回のみ)とし、逐次交替していく方針とする。発足時の委員は次の通り選任され、本人の了承を得次第委嘱する。

委員長 村木潤次郎

委員 藤平正夫、松田雄一、西村政晃、重広恒夫、今西寿雄、大塚博美、宮下秀樹、原真、橋本清、鹿野勝彦、江本

図書受入報告

図書委員会

平成元年6月受入分報告

1. CJ 編集部編「新版関東の岩場」白山書房 平成1(版元寄贈)
2. 群馬県山岳連盟編「群馬の山2」上毛新聞社 平成1(版元寄贈)
3. 自然公園美化管理財団「新・美しい自然公園5(十和田湖)」同財団 平成1(版元寄贈)
4. 西澤信雄著「続・みちのく朝日連峰山だより」山と溪谷社 1989(版元寄贈)
5. 花畑日尚著「諸国名山案内 第3巻 関東」山と溪谷社 1989(版元寄贈)
6. 大場秀章著「秘境・崑崙山を行く」岩波書店 1989(著者寄贈)
7. 石川の山編集委員会編「石川の山」石川県山岳協会 平成1(版元寄贈)
8. 遠藤由加著「青春のヒマラヤ」東京新聞出版局 平成1(版元寄贈)
9. 牛窪浩著「遺稿カシミール紀行」カシミール会 1989(版元寄贈)
10. 三宅修著「裏山の博物誌」山と溪谷社 1989(版元寄贈)
11. 山里寿男著「道ひとすじ 画文集」筑摩書房 1989(版元寄贈)

寄贈)

12. 文部省登山研修所編「山岳遭難救助技術」同所 平成1(版元寄贈)
13. Paul Hunt "Hiking in Japan" Kodansha Int. 1988(版元寄贈), 4月受入分
14. Bill Birkett "Modern Rock and Ice Climbing" Black 1988(購入)
15. John Barry Rogear Mear "Climbing School" Stanley Paul 1988(購入)
16. John Barry "Snow and Ice Climbing" Crowood Pr. 1987(購入)
17. Martyn Hurn Par Ingle "Climbing Fit" Crowood Pr. 1988(購入)
18. John Barry "Alpine Climbing" Crowood Pr. 1988(購入)
19. John Barry "K2" Oxford Illustrated Pr. 1987
20. "The Ark" Chick Pub 1976 (Ernest Virary 氏寄贈)

7月受入報告

1. 登高会編「登高行(復刻)I~VII. 別冊」出版科学 総合研究所 昭和62(編者寄贈)
2. 根深誠著「風の冥想ヒマラヤ」立風書房 1989(著者寄贈)
3. 日本山岳会東海支部「日本山岳会東海支部 インドヒマラヤ実年登山隊'88報告書」同会同支部 1989(鈴木常夫氏寄贈)
4. おいらく山岳会編「山行手帳」同会 平成1(版元寄贈)

嘉伸 以上十二名

報告事項

(1)委員会報告

●総務委員会(藤井)：全国支部懇談会「89伯耆大山の集い」(十月二十八・二十九日)。山陰支部より、重ねて参加要請あり。多数参加を希望。他に会員懇談会(十一月十六日)、年次晩餐会(十二月二日)の準備を行っている。

●会報編集委員会(小倉)：滞っていた原稿も九、十月号を増頁することにより追いつく予定。原稿締切り・発行日迄の期日短縮を検討したが、第二木曜日の理事会議事録は、原稿締切日の十日を過ぎてから開催されるので、翌々月になる。出来れば第一週に繰上げ開催できないかとの要望あり。これに対して村木副会長より、編集期間の短縮につき再度研究して欲しい旨、重ねて要望があった。

●山岳編集委員会(小倉)：例年通り、嶽ソウワ広告に、広告集めを依頼したので、広告掲載先の紹介につきご協力願いたい。内容は目次予定の通りである。

●フィルム委員会(織田沢)：中沢義直氏作品「わが山常念山脈」は優れた作品なので、会のライブラリーに入れたらどうかとの意見もあるので、近日中に作品を見た上で検討したい。

●医療員委員会(関口)：九月三日に委員会を開き、大森薫雄委員を委員長に互選した。登山医学研究会は、来年は第十回目を迎えることになるので、七月十四・十五日、市ヶ谷の私学会館で開催することにし、翌十六日には、マリオンにおいて、第十回大会を記念した、一般登山者を対象とする記念講演会を考えている。他にミニ・シンポも開催する予定。なお『登山医学』第九号は十二月に刊行の予定。

●高所登山委員会(伊丹)：近日中に委員会を開催して、具体的活動に入る予定。なおタンポチェ僧院の再建募金については、重ねてご協力をお願いしたい。

●自然保護委員会(松本)：Woodland Mountain Institute からの Mt. Everest Ecosystem Conservation Program に対する参加協力要請の件。沼田真会員、JICA の丸尾会員にも問合せたが、ICIMOD は知っているが、この計画については知らないとのこと。趣旨は結構であるので、もう少し実態を調査した上で結論を出すことにしたい。

九月三日の富士観察山行は雨に降られた。十月七日の全国集会は、四十四名参加の予定。

なお、村木副会長より、七月の理事会で委員についても、関口をひろげて

欲しい旨の要望が出されたが、委員の顔ぶれを見る限り改善されていない旨、重ねて要望があり、藤平副会長からも「立山の自然を守る会」の実例など上げながら、本会の自然保護の在り方について意見がのべられた。

●資料委員会(織田沢)：田部井会員が出席予定のイタリアの Montagna Adventura 2000 の国際会議に出席する資料は、田部井会員より具体的計画が出るのを待っている。中村テル名譽会員からも資料受入れ準備中である。なお、委員会で管理している本会所蔵の資料については、目下目録を作成中である。完成次第公開する予定。

●科学研究委員会(関口)：雨具のシンポジウムは十月十五日(日)青山学院にて開催予定。マッキンリーの気象遭難に関するシンポジウムは来年初めに実施の予定。他に風力発電に関する研究会も計画。

日本学術振興会より、授賞候補者の推薦依頼のあった秩父宮記念学術賞の件については、九月二十一日の科学研究委員会検討し、十月の理事会に上程する予定。日本雪氷学会より支援方依頼のあった、弘前市での同学会全国大会(十月二十七・三十一日)の件についても検討の予定。

●海外連絡委員会(松田)：海外の山岳会に対する会長交替の挨拶状を発送

した。フランス、イタリア、チェコ、カナダ等の諸国より、国際登山会議や映画祭の参加要請等が届いているが、時間的に会員に案内する方法がなく苦慮している。

●婦人懇談会(穴田)：九月二日のビール・パーティーは五十五名の参加者を得て盛会裡に終了した。全国婦人集会は来年尾瀬で開催の予定。

●学生部(早坂)：韓国登山、クスムカンダルの報告に各大学の記録を加えて、学生部89年度年報を印刷中。十月中旬刊行予定。

●集会委員会(入澤)：場所未定であった、一月中旬のスキー集会は八方山荘(国民宿舎)で開催予定。定員四十名。

南米ワスカランでは、クレバス転落事故があったが、幸い大事には至らなかった。予定通りの山行を終了した。

●山研委員会(石橋)：山研の利用状況は八月末で四八七名に達し、昨年、一昨年の利用者数を上廻った。十月二十一日閉所の予定。

八月二十六日「山研を考える集い」を山研委、集会、婦懇の共催で現地で実施した。二十六名の参加者があり、貴重な意見を聞くことができた。

●図書委員会：山本担当理事が、海外出張のため、直接話を聞くことが出来なかったが、図書受入れ等の管理業務

を事務局へ引き継ぐ件については、当初八月一日より実施の予定であったが、未だに実施できずにいる。山本理事が九月二十六日に帰国することになるので、早期実施方お願いすることにする。

(2) その他報告事項

ナンガバルバット帰国挨拶：早坂

なお七月十八日落雷により遭難死された馬場哲也氏の追悼会は九月三十日午後七時より、私学会館で開催の予定。

十月理事会

十月十一日、十八時三〇分
場所 本会議室

出席者 山田会長、村木、藤平両副会長、松田、西村、山本、織田、早坂、入沢、穴田、小倉、関口、松本、伊丹、石橋、藤井の各理事、小倉、大島、平林、橋本、大森の各常任評議員
(委任出席) 重広、小林両理事、太田、飯野両監事

▽議事

審議事項

(1) 秩父宮記念学術賞授賞候補者推薦の件

科学研究委員会より推薦のあった二件につき、慎重に審議の結果、昨年に引きつづき、山の気象研究会による「登山に関する気象学の研究」を推薦することに決定

(2) 中華民国山岳協会成立四十二周年行

事ならびに安全登山訓練センター落成式招待の件

織田沢理事を派遣することを承認

(3) 海外登山基金委員会承認の件

九月の理事会で推薦された、村木委員長以下十二名の委員を原案通り承認する。

(4) 支部設置についての方針検討の件

総務担当の松田理事より、全国支部事務局会議を前に、支部より質問のある、「本会は積極的に支部を増やしていく方針であるのか」という質問に対し検討して欲しい旨提案あり、検討の結果次のように方針を確認した。

本会には「支部設立並びに運営に関する規定」があり、支部設立に関する要件が満たされれば、何時でも何処でも設立することができる。ただし、いから当該地域に会員がいても、当事者間で、支部をつくらうという意欲がなければ、作っても意味がない。要は、支部は、理事会の要請に基いて作られるものではなく、当該地域在住会員の要請により作られるべきものであることを確認する。

報告事項・他

◎高所登山(伊丹)：十一月中旬に委員会を開催して、活動を開始する。P・ハーベラー氏の講演会に、会長挨拶依頼の要請あり。タンボチェ募金は十月九日現在五一六、〇〇〇円に達した。

◎学生部・青懇(早坂)：年報第六号を刊行した。最近遭難死亡事故が目立つので、十月二十五・二十六日、OBを含めた山岳遭難に対する討論会を行い、十二月七日に冬山を前に講演会の形で発表したい。なお十二月三日に皇居一周マラソン大会があるのでOB各位の参加を歓迎する。

◎図書(山本)：図書交換会の準備中。事務局への業務移管については早急に実施したい。

◎科学研究(関口)：マツキンリーの気象遭難に関するシンポジウムは二月十七日、自然エネルギー利用の講演会は四・五月に予定。

◎医療(関口)：十月四日に遭難対策・指導・集会の要請により「高齢者の健康とスポーツ」に関するレクチャーを実施。

◎山研(石橋)：九月末迄の利用者累計五九〇名に達した。十月二十一日閉所の予定

◎集会(入沢)：十月二十二日、裏妙義現地小集会を実施する。

◎婦懇(穴田)：十月一日、都立大牧野標本館を訪ねる鎌倉ハイイクを実施。二十名の参加者があり好評であった。

一月の新年会で婦懇の在り方検討の予定

財務(西村)：九月上半期の実績は収入総額一億八〇七万円(七〇〇〇万円)

の海外登山基金繰入金を含む)、支出の部では、総額一、九五四万円(運営管理費一、三三二万円、事業費約七〇〇万円)で順調に推移している。

なお九月末の本会の正味財産額は二億四一七〇万円である。

◎自然保護(松本)：十月七・八日、戸隠において全国自然保護集会を開催。四十三名参加。席上、信濃支部からは岩菅山の冬期オリンピックコース、横通岳他二件のロープウエーの問題が報告され、山陰支部からは、大山の崩壊による植生破壊の保全対策が問題点である旨説明があった。他に尾瀬を守る懇話会(大石武一会長)より尾瀬の入山料の問題で協力方要望が届いている。なお村木副会長より要望のあった委員増員の件については、岡島成行、小林光(交渉中)を増員したい旨説明あり、本件承認する。

◎山岳(大森)：会報も同様であるが、原稿締切り期日を厳守しないで、編集委員に編集期間の短縮を要望されても困る。編集委員の立場も考えて欲しい旨要望があった。これに関連し山田会長からは、山岳の目次内容については、変更可能な早い時期に理事会に説明して、了承をとって欲しい。変更が困難となつてから説明されても困るとの意見が述べられた。

その他報告事項

(1)十月十五日芦安村にて「南アルプス紅葉まつり」が開催される。(松田)

(2)在シャモニー、シャモニー友の会(会長神田泰夫氏)より、モンブラン山群で亡くなった邦人アルピニストの冥福を祈るため慰霊碑を建立し、十月十五日慰霊祭を行うことになったので協力願う度い旨の連絡があった。(松田)

(3)スイスクレジット銀行ビル(全日空ホテル隣り)内にスイスアルプス博物館を設置する計画があり、協力方要請がきている。(大森)

(4)計報

鄭在泓、岡茂雄、野口秋人氏が相次いで亡くなられた。本会からは弔電を以て弔意を表した。(松田)

(5)本日の入会承認者、秀島敏氏他十一名、復活会員は、中村静雄、鶴木洋の二名 (Y・M)



(9月)

2日 ビールパーティ

4日 総務委員会

5日 婦人懇談会

7日 会報編集委員会、図書委員会

12日 山研委員会、自然保護事務局会

議

13日 常務理事会

14日 理事会

18日 総務委員会
20日 三水会
21日 資料委員会、科学委員会、学生部
25日 ファイルム委員会、総務委員会
26日 自然保護委員会
27日 ネパール人來訪(マスコミ関係)
28日 学生部総会
30日 常務理事会
九月來室者384名

● 会員異動 9月

退会

小林由美子(八七七三)

終身会員へ

藤井 健(三四二五)

物故

及川敬一(八七六三)

9・30

休会復帰

伊藤寿男(六二二三)

昭和55年8月より9年間休会

お知らせ

● 八方尾根スキー集会

恒例のスキーを左記の様にいたします。多数ご参加いただきますようご案内申し上げます。

期日 一月十三日(土)～十五日(月)

場所 八方池山荘(八方尾根第一ケルン)

会費 一万六千円

申込み締切り 十二月二十日

参加申込みおよび会費送付先

〒157世田谷区北島山一四二―二八

神山良雄

協和銀行府中中河原支店 日本山岳会

集会 店番199 普通599373

● 現地小集会「大菩薩峠」

集会委員会

集合 十二月十七日(日)

中央本線 塩山駅

午前九時十五分(新宿発 各

停六時八分発、または特急あ

ずさ七時三十分発)

コース

裂石―上日川峠―大菩薩峠―

大菩薩嶺―丸川峠―裂石

申込み

十二月四日まで事務局へ

● 山里寿男個展

『画文集・道ひとすじ』、『山の絵の描き方』出版記念―

〔会期〕 十二月七日(木)～十九日(火)

ただし、十二月十三日(水)は

休廊

〔場所〕

東京都町田市原町田六―十四
―四 興輪ビル3F

小田急線町田駅東口徒歩一分
ギャラリー光彩

TEL〇四二七(22)七八九二

(代表 今福克保―会員番号九六一五)

〔出品予定作品〕

前記二冊の原画 二〇〇三〇点

チベットの関係 巡礼の人(P20)・

木洩れ日(P15)・出発の朝(P

30)・ポタラ宮殿(P50)

アルプス 翔る(シヤモニー針峰

群・P60)

パタゴニア テパインネ峰(P40)

日本の山 五岳ほか

● 山の絵「三人展」のご案内

日時 十一月二十七日(月)～十二月三

日(日)十一時～十八時(最終日

十七時まで)

場所 東京都中央区日本橋室町一丁目

一―十三―一〇

室町ギャラリー・TEL03―

241―1922

地下鉄三越前下車三越本店反対

側木屋横入、昭和通り一ツ手前

左折

出展者 鈴木正俊(版画)、三宅次郎

(油彩)、榎本進(油彩)ともに

JAC会員

● 「後藤三男油絵展」

―信州の山と安曇野を描く―

日時 平成二年一月十八日(木)～二十

四日(水)

場所 東急日本橋店六階 美術画廊

〔訂正〕 会報五三〇号二頁三段目、左から八行目に「登高会会長の」とあるのは、「登高会会員の」の誤りですので、お詫びして訂正いたします。

編集後記 ◇たて続けて二〇頁建にしたのでようやく軌道にのった。だいぶ記事がホットになったのはお気づきですか。

◇立山で中高年の多量遭難事故が起きた。季節の変わり目の山はおそろしい。吾々も心しなければならぬ。

(A・O)

平成元年十一月二十日

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 山田 二郎

編集代表 小倉 厚

電話東京(03)四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一―三―六

印刷所 株式会社 技報堂